

春山秋山

楠山正雄

青空文庫

むかし、但馬国たじまのくににおまつられになつてゐる出石いずしの大おお神かみのお女むすめに、出石少女いずしおとめという大たいそう美うつくしい女神めがみがお生うまれになりました。この少女おとめをいろいろな神かみ様さまがお嫁よめにもらおうと思おもつて争あらそいました。けれども少女おとめはお嫁よめに行くことをいやがつて、だれのいうことも聴きこうとはなさいませんでした。

この神かみさまたちの中に、秋山あきやまの下した水みづ男おとこと春山はるやまの霞かすみ男おとこという兄きょうだい弟あにの神かみさまがありました。ある日あに兄あきやまの秋山あきやまの下した水みづ男おとこは、弟おとこの霞かすみ男おとこに向むかつて、

「わたしはあの少女おとめをお嫁よめにもらいたいと思おもつていろいろに骨ほねを折おつてみたが、どうして
もいうことを聴きいてくれない。どうだ、お前まえならもらえと思おもうか。」

と聞ききました。

「わたしなら、わけなくもらつてみせますよ。」

おとうとおとうとかみかみと弟あにの神かみが、笑わらいながらいました。

「ふん、そんならお前まえとわたしと、どちらが早はやく少女おとめをもらうか競きようそう争そうをしよう。もし

わたしが負ければ、この着物をぬいでお前に上げよう、そしてわたしの背の高さだけの大きなかめに酒をなみなみ盛って、海山のごちそうを一通りそろえて、お客に呼んでやろう。」

「いいました。すると霞男はいよいよおもしろがって、

「ようございませとも。そのかわり万一わたしが負けたら、にいさんの代わりに、わたしがごちそうをしましょう。」

こう約束をして別れました。

弟の神はそれからうちへ帰って、兄神と賭をしたことをおかあさんに話しますと、おかあさんは、

「よしよし、わたしがその賭に勝たせて上げよう。」

とおっしゃいました。

おかあさんはそれから、一晩のうちにたくさんの藤のつるで、着物と袴と、靴から靴つ下まで織つて、編んで、縫つて、その上にやはり藤のつるで、弓と矢をこしらえて下さいます。

弟の神は大そう喜んで、おかあさんのこしらえて下さった藤づるの着物や靴を体につけ

て、藤ふじづるの弓ゆみや矢やを手に持もちました。そして、うきうきうかれながら、野のを越こえ山をを越こえて、少女おとめの家いえへ急いそいで行いきました。

いよいよ女神めがみの家の前まえまで来きますと、着物きものから靴くつから弓ゆみや矢やまで、残のこらず一度いちどにぱつと紫むらさきいろのふじ花はなが咲さき出だして、それは絵えにかいたような美うつくしい姿すがたになりました。それから弟おとうかみの神かみは、藤ふじの花はなの咲さいた弓ゆみや矢やを少女おとめの居い間まの戸との前まえにたてかけておきますと、少女おとめが出でがけにそれを見みつけて、ふしぎに思おもいながら、きれいなものですから、つい手に持もって出でようとなりました。そのとき弟おとうかみの神かみはすかさずそのあとについて行いって、

「あなた、どうぞわたしのお嫁よめになつて下ください。」

といいました。少女おとめはびつくりして、ふと自分じぶんに物ものをいかけたものの方ほうをふり向むきますと、そこに目めもくらむように美うつくしい花はなに飾かざられた若わかい男おがみ神かみが、気け高たかい姿すがたをして立たつていました。少女おとめはすぐ男おがみ神かみのお嫁よめになりました。やがて二人ふたりの間あいだには子供こどもが一人ひとり生まうまれました。

その後弟の神は兄の神に向かつて、

「いつぞや約束したとおり、わたしは少女をお嫁にもらつて、子供まで出来ました。だから約束のとおり、あなたの着物をぬいで下さい。それからごちそうをたんとして下さい。」

といいました。

けれども兄神は弟神の幸福をねたましく思つて、さもいまいましうに、

「そんな約束はした覚えがないよ。」

といつて、まるで着物もくれないし、ごちそうもしませんでした。

弟神はくやしがつて、おかあさんの女神の所へ行つていいつけました。すると女神

はおおこりになつて、兄神に、

「あなたはなぜうそをつくののです。神のくせにいやしい人間のするよううそをつくとするのは何事です。」

とわかりました。

それでも兄神はやはり約束を果たそうとしませんでした。すると女神は出石川の島の島に生きていた青竹を切つて来て、目の荒いかごをこしらえました。そしてその中

へ、川の石に塩しおをふりかけて、それを竹たけの葉はに包つつんだものを入れて、

「この兄神あにがみのようなくそつきは、この竹たけの葉はが青あおくなって、やがてしおれるようになって、しおれてしまえ。この塩しおが干ひからびるように干ひからびてしまえ。そしてこの石いしが沈しずむように沈しずんでしまえ。」

とのろつて、そのかごをかまどの上うへにのせておきました。

すると兄神あにがみはそのたたりで、それから八年ねんの間干あいなからびて、しおれて、病やみ疲つかれて、さんざん苦くるしい目めにあいました。それですっかり弱よわりきつて、泣なき泣なきおおかさんの女神めがみにおわびをしました。

そこでやつと女神めがみがのろいをといておやりになりますと、兄神あにがみはまたもとのとおりの丈夫じょうぶな体からだにかえりました。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：佳代子

2004年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春山秋山

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>